

瓜の涙

泉鏡花作

一

年紀は少いの、餘程好きだと見えて、然もおいしさに煙草を喫みつゝ、
・・・しかし烈しい暑さに弱つて、身も疲れた様子で、炎天の並木の下に憩んで居る學生がある。

まだ二十歳そこらであらう、久留米緋の、紺の濃く綺麗な處は初々しい。けれども、着がへのなさが、幾度も水を潜つたらしく、肘、背筋、折りかゞみのあたりは、然らぬだに、あまり健康さうにはないのが、薄痩せて見えるまで、其の處色が褪せて禿げて居る。――茶の唐縮緬の帯、それよりも煙草に相應はないのは、東京のなにがし工業學校の金の徽章のついた制帽で、巻蓑ならまだしも、喫むで居るのが刻煙草である。

場所は、言つた通り、城下から海岸の港へ通る二

里餘りの並木の途中、ちやうど眞中處に、昔から傳説を持つた大な一面の石がある。――義經記に、

加賀國富樫と言ふ所も近くなり、富樫の介と申すは當國の大名なり、鎌倉殿より仰は蒙らねども、内々用心して

判官殿を待奉るとぞ聞えける。武蔵坊申しけるは、君はこれより宮の越へ渡らせもはしませ、――

とある。金石の港で、即ち、舊の名宮の越である。

眞偽のほどは知らないが、おなじ城下を東へ寄つた隣國へ越る山の尾根の談義所村と云ふのに、富樫があとを追つて、つくり山伏の一行に杯を勧めた時、武蔵坊が鳴るは瀧の水、日は照れども絶えずと、謡つたと傳ふる（鳴は瀧）小さな瀧の名所があるのに對して、此を義經の人待石と稱ふるのである。行歩健かに先立つて來たのが、あるき惱むだ久我どの、姫君――北の方を、乳母の十郎權の頭が扶け參らせ、後れて來るのを、判官がこの石に憩つて待合

はせたと云ふのである。目覺しい石である。夏草の茂つた中に、高さはたゞ草を抽いて二三尺ばかりだけれども、廣さ凡そ疊を數へて十五疊はあらう、深い割目が地の下に徹つて、もう一つ八疊ばかりなのと二枚ある。以前は此が一面の目を驚かすものだったが、何の年かの大地震に、坤軸を覆して、左右へ裂けたのださうである。

また此の石を、城下のものは一口に呼んで巨石とも言ふ。

石の左右に、此の松並木の中にも、形の丈の最も勝れた松が二株あつて、海に寄つたのは亭々として雲を凌ぎ、町へ寄つたは拮蹠して、枝を低く、彼處に湧出づる清水に翳す。・・・・・・

其處に、青き苔の滑かなる、石圍の掘抜を噴出づる水は、音に聞えて、氷の如く冷やかに潔い。人の知つた名水で、並木の清水と言ふのであるが、此は踏傍に自から湧いて流るのでなく、人が圍つた持主があつて、清水茶屋と言ふ茶店が一軒、田畝の

土^ど手^て上^{うへ}に廂^{ひさし}を構^{かま}へた、本^{ほん}家^{んけ}は別^{べつ}の、出^で茶^ぢ屋^やだけれど
も、一^ち寸^{よつと}見^み霽^{はらし}の座^ざ敷^{しき}もある。あ^あの低^{ひく}い松^{まつ}の枝^{えだ}の地^ぢ紙^{がみ}
形^{なり}に翳^{さしおほ}蔽^ほへる葉^はの裏^{うら}に、茸^{よしず}簣^すを掛^かけて、掘^{ほりぬき}抜^ぬきに繞^{めぐ}
した中^{なか}を、美^{うつく}しい清^{しみづ}水^{みづ}は、松^{まつ}影^{かげ}に揺^ゆれ動^{うご}いて、日^{ひざかり}盛^{もり}
にも白^{しら}銀^{がね}の月^{つき}影^{かげ}をこぼして溢^{あふ}るゝのを、廣^{ひろ}い水^{すみ}槽^{さう}で
うけて、其^その中^{なか}に、眞^ま桑^{くわ}瓜^わ、西^{すい}瓜^{くわ}、桃^{もも}、李^{すもも}の實^みを冷^{ひや}
して賣^うる。・・・・・
名^な代^{だい}である。

二

また畠^{はたけ}一^{いち}帯^{たい}、眞^ま桑^{くわ}瓜^わが名^{めい}産^{さん}で、此^この水^{みづ}あるがため

か、巨石の瓜は銀色だと言ふ……瓜畠がづ
ツと續いて、やがて蓮池に成る……それか
らは皆青田。

畑のは知らない。實際、水槽に浸したのは、眞蒼
な西瓜も、黄なる瓜も、颯と銀色の蓑を浴びる。あ
くどい李の紅いのさへ、淡くくる／＼と淺黄に舞ふ。
水に迸る勢に、水槽を装束上つて、そこから百條
の簾を亂して、溝を走つて、路傍の草を、さら／＼
と鳴して行く。

音が通ひ、雫を帯びて、人待石　――　巨石の割
目に茂つた、露草の花、蓼の紅も、こゝに腰掛け
たと言ふ判官の其の山伏の姿は爽かに鎧うたる、色
よき絨毛を思はせて、黄金の太刀も草摺も鳴るよ、
とばかり、松の梢は颯と、清水の音に通つて涼しい。
けれども、涼しいのは松の下、分けて清水の、玉
を鳴して流るゝ處ばかりであらう。

三間幅　――　並木の道は、眞白にキラ／＼と太
陽に光つて、ごろた石は炎を噴く……兩側の松は梢
から、枝から、おのが影をおのが幹にのみ這はせ

つゝ、眞黒な蛇の形を蜿らす。

雲白く、秀でたる白根が嶽の頂に、四時の雪は
ありながら、田は乾き、畠は割れつゝ、瓜の畠の葉
も赤い。来た處も、行く道も、露草は胡麻のやうに
乾び、蓼の紅は蚯蚓が爛れたかと疑はれる。

人の往來はバツタリない。

大空には、恰も此の海の沖を通つて、有磯海から
親不知の濱を、五智の如來へ詣つると云ふ、泳ぐの
に半身を波の上に顯して、列を造つて行くとか聞く、
海豚の群が、毒氣を吐掛けたやうな入道雲の低いの
が、むく／＼と推並んで、動くともなしに、見て居
ると、地が揺れるやうに、ぬツと動く。

見すばらしい、が、色の白い學生は、高い方の松
の根に一人居た。

見ても、薄桃色に、又青く透明る、冷い、甘い露
の垂りさうな瓜に對して、もの欲氣に思はれるのを
恥ぢたのであらう。茶店にやゝ遠い人待石に――
で、其の石には腰も掛けず、草に蹲つて、そし

て妙な事をする。 煙草を喫むのに、
燐寸を摺つた。が、燃さしの軸を、消えるのを待つ
て、もとの箱に入れて、袂に藏つた。

乏しい様子が、燐寸ばかりも、等閑になし得ない
道理は解めるが、焚残りの軸を何にしよう

蓋し、此の年配ごろの人数には漏れない、判官鼻
肩が、其の古跡を、取散らすまい、犯すまいとした
のであつた ー

「此の松の事だらうか。」
ー 金石の湊、宮の腰の濱へ上つて、北海の鮫と
烏賊と蛤が、開帳まゐりに、此處へ出て來たと云
ふ、滑稽な昔話がある ー

人待石に憩んだ時、道中の慰みに、おの／＼一藝
を仕 らうと申合す。と、鮫が眞前にちよろ／＼と
松の木为天邊へ這つて、脚をぶらりと、
「藤の花とは何うだの、下り藤、上り藤。」と縮
んだり伸びたり。

烏賊が枝へ上つて、鰭を張つた。

「印 半纏見てくんねえ。

鳶職のもの、鳶職

のもの。」

其處で、蛤が貝を開いて、

「善光寺様、お開帳。」と恚う言ふのである。

鉦豆煙管を嚙むやうに啣へながら、枝を透かして

仰ぐと、雲の搦んだ暗い梢は、ちら／＼と、今も紫

の藤が咲くか、と見える。

「――― 彼處に鮎が居ます ―――」

と此の高松の梢に掛つた藤の花を指して、連の職人が、いまの其の話をした時は……丁ど藤つゝじの盛な頃を、父と一所に、大勢で、金石の海へ……船で鰯網を曳かせに行く途中であつた……

樂しかつた……既う其處の茶店で、大人たちは一度吸筒を開いた。早や七年も前に成る……梅雨晴の青い空を、流るゝ雲に乗るやうに、松並木の梢を縫つて、すう／＼と尾長鳥が飛んで居る。

長閑に、靜な景色であつた。

と炎天に夢を見る様に、恍惚と松の梢に藤の紫を思つたのが、俄に驚く！ 其次なる烏賊の藝當、鳶職と言ふのを思ふにつけ、學生の其の迫つた眉は忽ち暗かつた。

松野謹三、渠は去年の秋、故郷の家が焼けたにより、東京の學校を中途にして歸つたまゝ、學資の出路に窮するため、拳を握り、足を爪立てゝ居るのである。

否、唯學資ばかりではない。……其の日々、の米薪さへ覺束ない生活の惡處に臨んで、――實は此日も、朝飯を濟ましたばかりなのであつた。

全焼のあとで、父は煩つて世を去つた。――残つたのは七十に近い祖母と、十ばかりの弟ばかり。父は塗師職であつた。

黄金無垢の金具、高時繪の、貴重な佛壇の修覆をするのに、家に預つてあつたのが火に成つた。其の償ひの一端にさへ、あらゆる身上を煙にして、尚ほ足りないいくらあつて、焼あとには灰らしい灰も残らなかつた。

貧乏寺の一間を借りて、墓の影法師のやうに日を送る。――

十日ばかり前である。

渠が寐られぬ短夜に……。疲れて、寐忘れ

て遅く起きると、祖母の影が見えぬ・・・
枕頭の障子の陰に、朝の膳ごしらへが、ちやんと
出来て居たのを見て、水を浴びたやうに肝まで寒く
した。――大川も堀も近い。・・・つひ
ぞ愚痴などを言つた事のない祖母だけれど、頃日の
餘りの事に、自分さへなかつたら、木登りをしても
學問の思ひは届かうと、其を繰返して居たのである
から。

幸に箸箱の下に紙切が見附かつた――それに、假名でほつ／＼と（あんじまいぞ。）と書いてあつた。

祖母は、其の日もおなじほどの炎天を、草鞋穿で、
松任と言ふ、三里隔つた町まで、父が存生の時に工
賃の貸がある骨董屋へ、勘定を取りに行つたのであ
つた。

七十の老が、往復六里。・・・骨董屋は
疾に夜遁げをしたとやらで、何の效もなく、日暮方
に歸つたが、町端まで戻ると、餘りの暑さと疲労と
で、目が眩んで、呼吸が切れさうに成つた時、生玉
子を一個買つて飲むと、蘇生つた心地がした。・・・

・
・
・

「根氣の藥ぢや。」と、そんな活計の中から、朝ごとに玉子を割つて、黄味も一二つわけにして兄弟へ・・・・・・・・萎れた草に露である。

――今朝も、其の慈愛の露を吸つた勢いで、謹三が此處へ来たのは、金石の港に何某とて、器具商があつて、其にも工賃の貸がある・・・・・・懸を乞ひに出たのであつた――

若いものゝ癖として、出た處勝負の元氣に任せて、影も見ないで、日盛を、松並木の焦げるが如き中途に來た。

暑さに憩ふだけだつたら、清水にも瓜にも氣兼のある、茶店の近所でなくつても、求むれば、別なる松の下蔭もあつたらう。

渠はひもじい腹も、甘く成るまで、胸に秘めた思があつた。

判官の人待石。

それは、其の思を籠むる、宮殿の大なる玉の床と言つても可からう。

四

かないはかいだう
金石街道の松並木、丁ど此の人待石から、城下の
空を振向くと、陽春三四月の頃は、天の一方をぽつ
と染めて、銀河の横ふ如き、一條の雲ならぬ紅の
霞が懸る。

遠山の櫻に髣髴たる色であるから、花の盛には相
違ないが、野山にも、公園にも、數の植わつた邸町
にも、土地一統が、櫻の名所として知つた場所に、
其の方角に當つては、一所として空に映るまで花の
多い處はない。 霞の瀧、かくれ沼、
浮城、もの語を聞くのと違つて、現在、誰の目にも
視めらるゝ。

見えつゝ、幻影かと思へば、雲のたゞずまひ、日
の加減で、其の色の濃い事は、一齊に緋桃が咲いた
ほどであるから、或は桃だらうとも言ふのである。

紫の雲の、本願寺の屋の棟にかゝるのは引接
の果報ある善男善女でないか、と拝まれない。が紅の
霞は其の時節に此處を通る鰯賣鯖賣も誰知らないも
のはない。

深秘な山には、谷を隔て、見えつゝ近づくべからざる巨木名花があると聞く。……いづれ、佐保姫の妙なる袖の影であらう。

花の屋氣樓だ、海市である。……雲井櫻と、其の霞を稱へて、人待石に、氈を敷き、割籠を開いて、町から、特に見物が出るくらゐ。

けれども人々は、唯雲を掴むで影を視めるばかりなのを。……謹三は一人其の花咲く天。――

雲井櫻を知つて居た。

夢ではない。……得忘るまじく可懐しい、たゞ思ふにさへ、胸の時めくりである。

此の年の春の末であつた。――

雀を見ても、燕を見ても、手束ねて、寺に籠つては居られない。其の日の糧の不安さに、はじめは唯町や辻をうろついて廻つたが、落穂のないのは知れて居るのに、登音にも、けたましく驚かされるのは、草の鶉よりも尚ほ果敢ない。

詮方なさに信心をはじめた。世に人にたすけのない時、源氏も平家も、取継るのは神佛である。

世間は、春風に大きく暖く吹かるゝ中を、一人陰に成つて霜げながら、貧しい場末の町端から、山裾の浅い谿に、小流の蜿々と、次第に、何ヶ寺も皆日蓮宗の寺が續いて、天満宮、清正公、辨財天、鬼子母神、七面大明神、妙見宮、寺々に祭つた神佛を、日課の如く巡禮した。

「……御飯が食べられますやうに、父が存生の頃は、毎年、正月の元日には雪の中を草鞋穿で其處に詣づるのに供をした。參詣が果ると雑煮を祝つて、すぐにお正月が来るのであつたが、此はいつまでも大晦日で、餅どころか、袂に、煎餅も、榧の實もない。」

一寺に北辰妙見宮のまします堂は、森々とした樹立の中を、深く石段を上る高い處にある。

「ぼろきてほうこう。ぼろきてほうこう。」
晝も梟が鳴交はした。

此の寺の墓所に、京の友禪とか、江戸の俳優其とか、墓があるよし、人傳に聞いたので、其を捜すともなしに、卵塔の中へ入つた。

墓は皆暗かつた、土地は高いのに、じめ／＼と、
落葉も拂はず、苔は萍のやうであつた。

ふと、生垣を覗いた明い綺麗な色がある。外の春
日が、麗かに垣の破目へ映つて、娘が覗くやうに、
千代紙で招くのは、菜の花に交る紫雲英である。

少年の瞼は颯と血を潮した。
袖さへ軽い羽かと思ふ、蝶に憑かれたやうに成つ
て、垣の破目をするりと抜けると、出た處の狭い路
は、飛々の草鞋のあと、まばらの馬の沓の形を、其
のまゝ印して、亂れた龜甲形に白く乾いた。其にも、
人の往來の疎なのが知れて、隈なき日當りが寂寞し
て、薄甘く暖い。

怪しき臭氣、得ならぬものを蔽うた、藁も蓆も、
早や路傍に露呈ながら、其處には董の濃いのが咲い
て、淡いのが草まじりに、はら／＼と數に亂れる。
馬の沓形の畠や、中窪なのが一面、青麥に菜を添
へ、紫雲英を畔に敷いて居る。．．．眞向う
は、この邊一帶に赤土山の兀げた中に、ひとり薄萌

黄ぎに包つまれた、土佐繪とさゑに似にた峰みねである。

唯と、此この一廓くわわの、徽章きしやうとも言いつべく、峰みねの簪かざしにも似にて、恰あたも紅玉こうぎよくを鑲ちりばめて陽炎かげろひの箔はくを置おいた状さまに眞紅しんくに咲さ静しづまつたのは、一株かぶの桃ももであつた。

綺麗きれさも凄すこかつた。すら／＼と呼吸いきをする、其その陽炎かげろひにもを言いつて、笑わらつて居ゐるやうである。

眞赤まっかな蛇へびが居ゐようも知しれぬ。

が、渠かれの身みに取とつては、食しょくに盡つきて倒たふるゝより、自然ひとりでに死しぬなら、蛇へびに巻まかれたのが本望ほんまうであつたかも知しれぬ。

袂たもとに近い菜なの花はなに、白しろい蝶てふが來きて誘さそふ。

あゝ、いや、白しろい蛇へびであらう。

其その桃ももに向むかつて、行ゆき状さまに、ふと見みると、墓はか地の上うへに、妙見宮めうけんぐうの棟むねの見みゆる山やまへ續つく森もりの裏うらは、山際やまぎはから崖上がけうへを彩いろつて――はじめて知しつた――
一面めんの櫻さくらである。……人ひとは知しるまい――
一面めんの櫻さくらである。

行ゆくに従したがうて、路みちは、奥擴おくひろがりにぐるりと山やまの根ね

を傳ふ。其の袂にも櫻が充ちた。

しばらく、青麥の畝に成つて、紫雲英で輪取る。

畔づたひに廻りながら、やがて端へ出て、横向に桃
を見ると、其の樹のあたりから路が坂に低く成る、
両方は、飛々差覗く、小屋、藁屋を、屋根から埋む
ばかり底廣がりに奥を蔽うて、見盡されない櫻であ
つた。

餘りの思ひがけなさに、渠は寂然たる春晝を唯一
人、花に吸はれて消えさうに立つた。

其の日は、何事もなかつた。――もとの墓地を
抜けて歸つた。――ものに憑かれたやうに成つて、
夜はおなじ景色を夢に視た。夢には、櫻は、しかし
桃の梢に、妙見宮の棟下りに晃々と明星が輝いた
のである。

翌日も、翌日も……。行つて其の三度の時、
寺の垣を、例の人里へ出ると齊しく、桃の枝を黒髪
に、花菜を褻にして立つた、世にも美しい娘を見た。
十六七の、瓜實顔の色の白いのが、おさげとか言
ふ、うしろへさげ髪にした濃い艶のある房りした、

其の黒髪の鬢が、故と成らずふつくりして、優しい
眉の、目の涼しい、引しめた唇の、やゝ寂しいの
が品がよく、鼻筋が忘れたやうに隆い。

縞目は、よく分らぬ、矢絰ではあるまい、濃い藤
色の腰に、赤い帯を胸高にした、とばかりで袖を覺
えぬ、筒袖だったか、振袖だったか、ものに隠れた
のであらう。

眞晝の緋桃も、其の娘の姿に露の濡色を見せて、
髪にも、髻にも影さす中に、其の瓜實顔を少く傾
いて、陽炎を透かして、峰の松を仰いで居た。

謹三は、ハツと後退りに退つた。――杉垣の
破目へ引込むのに、かさ／＼と帯の鳴るのが淺間し
かつたのである。

氣咎めに、二日ばかり、手繰り寄せらるゝ思ひを
しながら、敢て行くのを憚つたが――また不
議に北國にも日和が續いた――三日めの同じ頃、
魂がふツと墓を抜けて出ると、向うの桃に影もな
い。……

勿體なくも、路々拝んだ佛神の御名を忘れようと

した處へ――花の梢が、低く靨黷く……藁屋は
づれに黒髪が見え、すらりと肩が浮いて、俯向いて
出た其の娘が、桃に立ちざまに、目を涼しく、と小
尻をしようとして、幹がぐれに密と覗いて、此方を
ば熟と視る時、俯目に成つた。

思はず、爾時渠は蹲んだ。そして煙草を喫んだ形
は、――此處に人待石の松蔭と同じである――
が、姿も見ないで、横を向きながら、二服とは喫
みも得ないで、慌しげに又立つと、精々落着いて
其方に歩んだ。畠を、やゝめぐり足に、近づいた時
であつた。

娘が、柔順に尋常に會釋して、

「誰方？……」

と優しい聲を聞いて、はつとした途端に、眞上な
山懐から、頭へ浴びせて、大きな聲で、

「何か、用か。」と喚いた。

「失禮！」

と言ふ、頸首を、空から天狗に引掴まるゝ心地が
して、

「通道ではなかつたんですか、失禮しました、失

禮れいでした。」

「—それから……寺てらまでも行き得えない。」

五

人ひとは何なんとも言いはゞ言いへ……
で渠かれに取とつては、花はなの其その一ひと里さとが、所いは謂ゆる、雲井櫻くもゐさくら
の仙境せんきやうであつた。たとへば大空おほぞらなる紅くれなゐの霞かすみに乗のつ
て、剩あまつさへ其その美うつくしいぬしを視みたのであるから。

町まちを行ゆくにも、氣きの怯ひけるまで、郷里きやうりにうらぶれた渠かれの身みに、――誰たれも知しるまい、――唯たゞ一人ひとり、秘密ひみつの境さかひを探さぐり得えたのは、潛ひそかに大おほいなる誇ほこりであつた。

が、ものゝ本ほんの中に、同おなじやうな場面ばめんを讀よみ、繪ゑの面おもてに、然さうした色彩しきさいに對たいしても、自おのづから面おもての赤あかう成なる年とし紀きである。

祖母としよりの傍そばでも、小ちひさな弟おとうこと一しよ所しょでも、胸むねに思おもふのも憚はげられる。・・・・・寝ねて一人ひとりの時ときさへ、夜よ着ぎの袖そでを被かぶらなければ、心こころに描ゑがくのが後うしろ暗くらい。・・

――其それを、此この機きくわい會かいに、並木なみきの松蔭まつかげに取とり出いで、深秘しんぴなるあが佛ほとけを、人待石ひとまちいしに、密ひそかに据すゑようとしたのである。

成なりたけ、人ひと氣け勢はひに遠とほざかつて、茶店ちやみせに離はなれたのに不思議ふしぎはあるまい。

其その癖くせ、傍そばで視みると、渠かれが目めに彩いろどり、心こころに映うつした――あの臍らふたけた娘むすめの姿すがたを、其そのまゝ取とり出だして、巨石おほいしの床ゆかに据すゑた處ところは、松並木まつなみきへ店みせを開ひらいて、藤娘ふぢすむめ

の繪を賣るか、普賢菩薩の勸進をするやうな光景であつた。

渠は、空に恍惚と瞳を据ゑた。が、餘りに懂るゝ煩惱は、却つて行澄ましたものゝ如く、容も心も涼しさうで、紺紺さへ松葉の散つた墨染の法衣に見える。

時に、吸つたのが悪いやうに、煙を手で拂つて、吠の煙草入を懐中へ藏ふと、靜に身を起して立つたのは――更めて松の幹にも凭懸つて、縋つて、あせつて、悶えて、――此處から見ゆると言ふ、花の雲井をいまはたゞ、蒼くも白くも、熟と城下の天の一方に眺めようとしたのであつた。

然りとも、人は、と更めて、清水の茶屋を、松の葉越に差窺ふと、赤ちやけた、ばさらな銀杏返をぐたりと横に、框から縁臺へ落掛るやうに浴衣の肩を見せて、障子の陰に女が轉がる。

納戸へ通口らしい、淺間な柱に、肌襦袢ばかりを着た、胡麻一鹽頭の亭主が、賣溜の錢箱の蓋を壓へる。仰向けに凭れて、あんぐりと口を開けた。

瓜畑を見透しの縁　ー　其處が座敷　ー　に
足を投出して、腹這ひに成つた男が一人、黄色な團
扇で、耳も頭もかくしながら、土地の赤新聞と言ふ
のを、鼻の下に敷いて居たのが、と見る間に、二ツ
三ツ團扇ばかり動いたと思へば、くるりと仰向けに
成つた胸が、臍まで寛がる。

清水はひとり、松の翠に、水晶の鎧を揺据ゑる。
蝉時雨が、唯一つに成つて聞えて、清水の上に、
ジーンと響く。

渠は心ゆくばかり城下を視めた。
遠近の樹立も、森も、日盛に煙の如く、重る屋根
に山も低い。町はづれを、蒼空へ突出た、青い薬研
の底かと見るのに、きら／＼と眩い水銀を湛へたの
は湖の尖端である。

あのあたり、あの空
と思ふのに　ー　雲はなくて、蓮田、水田、畠
を掛けて、むく／＼と列を造る、あの雲の峰は、海
から湧いて地平線上を押廻す。

冷^{つめた}い酢^すの香^かが芬^{ぶん}と立^たつと、瓜^{うり}、李^{すもも}の躍^{をど}る底^{そこ}から、
心^{こころ}太^とが三^{さん}ツ、四^よツむく／＼と泳^{およ}ぎ出^だす。
清^{しみづ}水^{みづ}は、人^{ひと}の知^しらぬ、こんな時^{とき}、一^{いち}層^{そう}高^{たか}く潔^{いさぎよ}く、
且^かつ湧^わき、且^かつ進^{ほとほし}るのであらう。
蒼^{ぎんばへ}蠅^{ばへ}がプーンと來^きた。
其^{そこ}處^こへ

六

如何^{いか}に、あ^あの體^{てい}では、蝶^{てふ}よりも蠅^{はへ}が集^{たか}らう・
・・さし捨^{すて}のおいらん草^{さう}など塵^{ちり}塚^{づか}へ運^{はこ}ぶ途^{とち}中に似^に
た、いろ／＼な湯^ゆ具^ぐ蹴^け出^だし。年^{とし}増^ままじりにあくどく

化粧けはつた少わかい女をんなが六にん七にん人、汗あせまみれに成なつて、つい
其處そこへ、並木なみきを來きかゝる。・・・・・年増としまぶん分ぶんが先さき
へ立たつたが、いづれも日蔭ひかげを便たよるので、拭よちれた洗濯せんたく
ものゝやうに、其その濡ぬれるほどの汗あせに、裾すそも振ふりもよ
れ／＼に成なりながら、妙めづに一列れつを造つくつた體ていは、率ひきあ
るものがあつて、一ひとからげに、繩尻なはしりでも取とつて居あさ
うで、淺間あさましいまであはれに見みえる。

故ゆゑあるかな、背後うしろに迫せまつて男をとこが二ふたり人。一ひとり人の少わかい
方ほうは、洋傘かうもりを片手かたてに、片手かたては、はた／＼と扇せんす子すを使つか
ひ／＼來くるが、扇せんす子めん面に廣くわつこく告こくの描かいてないのが可を訝かし
いくらゐ、何なんのためか知しらず、絞しぼりの扱しごき帯おびの背せ中なかに漢かん
竹ちくの節ふしを詰つめた、杖すてうきだか、鞭むちだか、朱しゆの總ふさのついた
奴やつをすくりと刺さして居ある。

年倍としばいなる兀頭はげあたまは、紐ひものついた大おほきな蝦蟇がまぐち口くちを突つ込こ
だ、布袋ほていばら腹はらに、禪ぜんのあからさまな前まへはだけで、土と
地ちで賣うる雪ゆきを切きつた氷こほりを、手拭てぬぐひにくるんで南たうなす瓜かぶ
りに、頤あじを締しめて、矢張やっぱり洋傘かうもり、此この大爺おほぢやいが殿ぢ
で。・・・・・

「あらず、水がある……」

と一人の女が金切聲を揚げると、

「水がある？」

と言ふなりに、こめかみの處へ頭痛膏を貼つた顔を掉つて、年増が眞先に飛込むと、忽ち、崩れたやうに列が亂れて、ばら／＼と女達が茶店へ駆寄る。

一寸立どまつて、大爺と口を利いた少いのが、續いて入り状に、

「ぢやあ、何だぜ、お前さん方　——　こゝで一休みするかはりに、湊ぢやあ、何處にも寄らねえで、すぐに、汽船だよ、船だよ。」

銀鎖を引張つて、パチンと言はせて、
「出帆に、最う、そんなに間もねえからな。」

「おゝ、暑い、暑い。」

「あゝ暑い。」

最う飛ついて、茶碗やら柄杓やら。諸膚を脱いだのもあれば、腋の下まで腕まくりするのがある。

年増の如きは、

「さあ、水行水。」

と言ふが早いか、瓜の皮を剥くやうに、ずるりと縁臺へ脱いで赤裸々。

黄色な膚も、茶じみたのも、清水の色に皆白い。

學生は面を背けた。が、年増に限らぬ。……言合せたやうに皆頭痛膏を、こめかみへ。その時、ぼかんと起きた、茶店の女のどろんとした顔にも、齊しく即效紙がはつてある。

「食べるが可い。よく冷えてら。堪らねえや。だが、あれだよ、皆、渡してある小遣で各々持だよ。――西瓜が好かつたらこみで行きねえ、中は赤いぜ、うけ合だ。……えへッへッ。」

きやあら／＼と若い奴、蝸の化けた聲を出す。

「眞桑、李を噛るなら、あとで鹽湯を飲みなよ。

――うんにや飲みなよ。大金のかゝつた身體

だ。

と大爺は大王の如く、眞正面の框に上胡坐に成つて、ぎろ／＼と膚をニす。

唯其の中を、すらりと抜けて、褌も慎ましいが、

ちら／＼と小刻に、土手へ出て、巨石の其方の隅に、
松の根に立つた娘がある。・・・手にも掬ば
ず、茶碗にも後れて、浸して吸つたかと思ふばかり、
白地の手拭の端を、蒼むやうに一寸啣へて悄れた。
巢立の鶴の翼を傷めて、雲井の空から落ちざまに、
宛如、晝顔の花に絶つたやうなのは、――島田鬚
に結つて、二つばかり年は長けたが、其だけに尚ほ
女らしい影を籠め、色香を湛へ、情を含むだ、・・・
・・・浴衣は、しかし帯さへ其の時のを其のま
で、見紛ふ方なき、雲井櫻の娘である。

「お前たち。渡した小遣。赤い西瓜。皆の身体。大金。――と渦の如く繰返して、其の娘のおなじやうに、おなじ空に、其の時、瞳をじつと据えたのを視ると、渠は、思はず身を震はした。面を背けて、港の方を、暗く成つた目に一目仰いだ時である。」

「火事だ、」謹三は殆ど無意識に叫んだ。

「火事だ、火事です。」

唯見る、偉大なる煙筒の如き煙の柱が、群湧いた、入道雲の頂へ、海ある空へ眞黒にすくと立つと、太陽を横に並木の正面、板を赫と赤く焼いた。

「火事。――と道の中へ衝と出た、人の飛ぶ足より疾く、黒煙は幅を擴げ、屏風を立て、千仞の斷崖を切立てたやうに聳立つた。」

「火事だぞ。」

「あら、大變。」

「大いよ！」 火事だ火事だと、男も女も口々に

「やあ、馬鹿々々、何だ、そんな體で、引込まね

えか、こら、引込まんか。」

と雲の峰の下に、膚脱、裸體の膨れた胸、大な乳、

肥つた臀を、若い奴が、鞭を振つて追廻す――

爪立つ、走る、緋の、白の、股、向脛を、刎上げ、

薙伏せ、挫ぐばかりに狩立てる。

「きやつ。」

「わツ。」

と呼ぶ聲、女どもの形は、黒い入道雲を泳ぐやう

に立騒ぐ眞上を、煙の柱は、じり／＼と蔽ひ重

る。……

畜生――修羅――何等の光景。

忽ち天に蔓つて、あの湖の薬研の銀も眞黒に成

つたかと思ふと、村人も、往來も、何時また／＼く間

か、どツと溜つた。

謹三の袖に、あゝ、娘が、引添ふ。……

あはれ、渠の胸には、清水が其のまゝ、血に成つて湧いて、涙を絞つて流落ちた。

ばら／＼ばら！

火の粉かを見ると、こはいかに、大粒な雨が、一粉づゝ、粗く、疎に、巨石の面にかゝつて、ばつと鼓草の花の散るやうに濡れたと思ふと、松の梢を虚空から、ひら／＼と降つて、胸を掠めて、ひらりと金色に翻つて落ちたのは鮒である。

「火事ぢやあねえ、龍巻だ。」

「やあ、龍巻だ。」

「あれ。」

と口の裡、呼吸を引くやうに、胸の浪立つた娘の手が、謹三の袂に縋つて、

「可恐い……………」

「……………」

「何うしませうねえ。」

と引いて縋る、柔い細い手を、謹三は思はず、しかと取つた。

——いかに成るべき人たちぞ……………

【完】